

朗 読 文

低く重い雪のカーテンが、たまに上がると釧路の街からは、阿寒、硫黄山、摩周岳など白銀をいただく連山がのぞまれる。五月、これら連山から吹きおろす北風がなごむと、街はいよいよ濃い霧に包まれはじめ、遠く海上には霧笛が響きはじめる。霧が晴れると、釧路は道東の政治・経済・文化の中心地であり、工業地帯の顔をのぞかせる。だから、この街は人々が「東洋のロンドン」と呼ぶ。霧に閉ざされた晩春から初夏にかけて訪れるのがよい。濃霧の中に昼間から車のヘッドライトや商店の灯が煙ったように輝き、人影がかすんだよううごめく——なにがシロマンを誘う風景である。

釧路原野は世界でも珍しいタンチョウヅルの繁殖地。阿寒川と釧路川の流域にまたがって、まりも国道沿いに広がるタンチョウヅル自然公園にサビタの花が咲くころ、深い霧の中に優美に往きかうツルを見、霧の彼方から、奇妙に野太いその鳴き声を聞くのも、霧の釧路を訪れる楽しみの一つである。

湿原や原生花園には、遠い春を待ちかねて草の芽が残雪の間に顔をのぞかせる。四月下旬、まずミズバショウの鮮やかな白い花の群落が道東を訪ねてくる。もっとも見事なのは女満別の網走湖畔のものだろう。ヤチダモの林の中にいっせいに花開くころはまだ残雪もあり、ほとんど観光客の目にはふれない。まだまだミズバショウといえ、尾瀬と答えるほど、尾瀬のミズバショウは有名だが、ここの群落は規模で尾瀬を凌ぐほどのものだ。足の便がまったくないわけではないから、憶えておかれるとよいと思う。また足寄から阿寒への途中でオンネトー湖畔のアカエゾマツ林の中や、釧路湿原にも、この花の咲き乱れるのを見ることができ。小さな群落ならそこそこ到るところにあるといつてよい。

このころ、まだ雪の残る水辺にエゾリュウキンカの黄金色の花が咲く。ミズバショウと並んで、北国の早春には欠かせない登場者だ。同じ頃、原生花園のさきがけとして、カラフトネコメソウの黄色い小さな花が遠慮がちに現われ、やがてオオバナエンレイソウがこれに代ると、いよいよ花園の花歴はたけなわとなつて行く。